

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前 : Guillermo Alejandro Antonio Aliaga Pajares
(ギリエルモ・アレハンドロ・アントニオ・アリアガ・パハレス) (ペルー)
- (2) 年 齢 : 35 歳
- (3) 参加事業 : 第 21 回「世界青年の船」事業参加青年 (2008 年度)
- (4) 職 業 : ペルー共和国議会主席アドバイザー、「VALDEZ, ALIAGA, CANALES & REYNA ABOGADOS」(法律事務所)
共同設立者



■ 参加の動機

私が「世界青年の船」事業 (以下、「世界船」という。) に応募したのは、大学の最終学年でした。当時は、**新しい出会いを求めて、人脈を広げるために新しい方法を模索**していました。また、海外を中心に新しい人と出会えるようなこれまでにない経験も求めていました。それまでも、家業の業務用印刷機販売の関係で、通訳を兼ねて海外出張 (チェコ共和国、アメリカ合衆国) や取引などは経験していましたが、異文化コミュニケーションという観点では経験がありませんでした。ある日、私の通うリマ大学の掲示板で「日本政府のプログラムで、日本の青年と交流しませんか」というポスターを見ました。これはペルー事後活動組織が作成したもので、「いつでも連絡ください」とも書いてありました。そこで、私は事後活動組織に連絡を取り、自己紹介をし、自分の大学経由で応募ができると知って、応募することになりました。どうやら、在ペルー日本大使館はいくつかの大学と青少年団体宛に、青年招への案内告知をし、大学もしくは団体推薦での大使館選考をする形式だったようです。2009 年時点では、このような推薦方式でしたので、多くの人が知っている事業ということではなかったと思いますが、その後事後活動組織の関与により、広報活動が拡大し、多くの若者に門戸が開く形となりました。リマ大学での面接だけでも大変競争率が激しく、英語でのエッセイと、学長との面接がありました。面接を経て私を含め 3 名が選ばれ、日本大使館の面接へ進みました。60 名程度が大使館面接を受け、11 名が合格しました。

■ 人的ネットワークの広がり

この事業は、私の期待に十分応えるものでした。事業では、自分らしくいられる環境に身を置くことで、同年代や年上の方との交渉力を高めることができました。また、**他の宗教に対して持っていた偏見をなくし、よりオープンマインドになる機会**も得られました。特に、**交渉術を磨けた**ことが役立ちました。世界船参加後、私はペルーに戻り、法学部を卒業し、その後、法学修士過程に進み、自分の法律事務所を設立しました。私は世界船の経験のおかげで、弁護士として中国人やインド人の事業家とのビジネスを成功させることができました。船でアジアの人々 (主に日本人) と活動したことで、彼らの視点や文化を理解することができ、交渉にとっても役立ちました。

2010 年、自分の同期が「ノルウェーの既参加青年がペルーに来るから、お茶でもどうか」と誘ってくれたのがきっかけで、その場に参加したところ、友人として同席していたのが中国の男性でした。「鉅業法に詳しい弁護士を探している」と言うので、私は自分が駆け出しの弁護士であると伝えました。その時点で鉅業法に精通してはいませんでした。一緒にビジネスをやることになり、その前年日本に行ったことを伝えると、アジアの習慣が分かるとして、大変歓迎されました。この中国人の手がけた鉅業プロジェクトがペルーで大きくなり、インドの会社を買収するにまで発展しました。

参加当初のネットワーク構築と言う目的に対して、私がここまで成功を手にする事ができ、感謝しています。既参加青

年がきっかけで始めたビジネスにより、鉱業法を勉強するきっかけとなりました。別の機会で、オーストラリア既参加青年やニュージーランド既参加青年から、財務的なアドバイスをもらうこともありました。2014年、ペルーで別の中国人と出会い、自分が鉱業法に詳しくすでに2つのプロジェクトを経験したことを伝えると、次のビジネスに発展しました。このことから、「オープンマインドでいること、他者の文化に興味を持つこと」で道が拓けると感じました。

世界船の体験がキャリアパスにどう影響しましたか。

世界船そのものが、大変ユニークでした。このような素晴らしい経験を、私の人生の中で再び経験することはできません。プログラムの構成により、私たちは**全てから切り離され、そして全ての経験をすることができました**。海外の人々、そして自分の国の参加青年たちと話し、交渉し、意見交換し、勉強し、社会活動をする機会があったことは、私にとって**最高の出来事の一つ**でした。

世界船は、私のキャリアパスに大きく影響しました。私は英語力を向上させることができ、その後海外の投資家やクライアントと話す機会を持つことができました。また、自分の同僚の多くと比べて、**他者の視点を理解し、尊重することに**長けていると思います。また、**タイプの異なる政治家についても知り、世界を変えるには「自分が知る以外の方法」もあるのだと理解することができました**。世界船参加前から私は勤勉な方でしたが、世界船ではとにかく「交渉ごと」がたくさんあります。日常でもたくさんの交渉がありましたが、国連コースにおいて経験豊かな青年たちとの交渉が多くありました。模擬の国連安全保障理事会の場で、参加国が話し合い、合意に辿り着かなくてはなりません。これらの経験は、自分が議員になってから大変役立ちました。また、**自分の国を代表することで、自分自身に誇りを持つことができ、議員に立候補する後押しとなりました**。リーダーシップの能力も向上し、ペルー議会の副議長や所属政党のスポークスマンになる機会も得ました。議会で副議長（Vice President）を選出する際に、自分の党から立候補しました。私のリーダーシップ、またこれまでの世界船やビジネスの交渉経験によって、うまく務められると分かったからです。選任当時33歳で、最若年層からの選出となりました。



ペルー共和国議会の副議長を務める（本人右から2番目）

■ 日本への印象

日本への印象は全く変わりました。参加前は、情報不足のため、日本はアジア文化の一つ、そして中国文化に似ているのかと想像するくらいでした。私は日本人に接して、日本人が自信を持ち、他者への尊敬を持つ、友好的な国民と分かりました。自信があるというのは、知っていることに対して丁寧に教えてくれる、という感じです。お世話になったホストファミリー先で、私が「少し体重を落としたい」と話したら、お父さんに「明日、雪の中を犬の散歩に行くからね」と言われ、翌日本当に朝 5 時に起こされ、犬の散歩に一緒に行きました。冗談だと思ったら、本気だったのです。日本人はもしかしたら「打ち解けるきっかけが必要」なのかも知れませんが、一度打ち解けたらとてもフレンドリーです。そして日本青年の中にも、アイスブレイクをしたらとても仲良くなった人たちがいました。そして、成功のためには基盤が大事という考え方も強かったです。日本が戦後から経済復興できたのも、団結力があつたからだと思います。事業終了後、私は日本社会が「改善力」が最も高いと気づきました。**日本人がいかにお互いを励まし合い、ベストを尽くしているかに驚かされました。**

■ 国連コースで身につけた交渉力

船内活動では、**国連コースに最も影響を受けました。**先生の独特の教え方が印象に残っています。「ミンダナオの戦争事件」解決のロールプレイを行い、参加青年各自が国連における一か国を代表しました。設定としては、ミンダナオ市民は国連平和維持軍の介入を拒んでいる、もちろん国連安全保障理事会はこの平和維持軍の関与を通じてミンダナオ市民を救いたいと思っているわけですが、ミンダナオ市民は自分たちが独立しており、自力で解決できと思っています。安保理事会のプッシュは、小さなところでも軋轢を生んでいきますので、塵が積もれば、最後にはコミュニケーションの誤解で大きな問題となります。アメリカ合衆国代表が拒否権を発動したと思えば、続いてロシアも拒否権を発動し、緊迫した中で先生がストップをかけ、解決のヒントを下さいました。この時ハツとしたのは、**当事者でいると熱心なあまり問題が見えなくなり、そこで数分でも場から離れて、相手側のニーズや要求について振り返ることが有効**ということです。私は国連メンバーの役を演じたことを、とても素敵な体験として記憶しています。知識や問題への認識も必要ですし、忍耐力、相手の考え方、**尽力すること、そして優れた交渉力を以て、初めて交渉が前に進むもの、成功するものだと実感**しました。参加した全員が Win の状態でなければ、そこに参加した意味がないからです。私は世界船でこの交渉力というものに大変興味を持ち、その後ハーバード大学で開講していた「ハーバード型交渉法（フィッシャー・メソッド）」のクラスを受講しました。ここで、世界船の国連コースで起きたこともより納得がいききました。私はこのように**交渉力を身につけ、議会でいかしている**のです。



法律の議論を副議長としてリード

寄港地活動での発見はありましたか。

寄港地活動では、ニュージーランドのオークランドへ寄港したことを鮮明に覚えています。国連プログラムの現場を訪問し、国連職員と話す機会がありました。交渉そのものについて、また、交渉を進展させ、良い状況を獲得するためには、常にオープンマインドで異文化を理解する必要があることなど、ここでも生の声を聞くことで多くのことを学びました。

■ 船だからこそ集中して取り組める

自らが旅をして、新しい人と出会い、新しい現実を知ることは本当に大切なことです。異文化を理解するためには、異文化に触れ、異文化の中で生活するような体験が必要です。船を使うということは、100%プログラムに集中できるという意味で、とても重要なことです。インターネットもなく、日々の問題もなく、ただただ自分と129人の他の参加青年が、お互いの文化や背景を学ぼうとしました。例えば、私はカナダ青年と日本青年と仲良くなりましたが、キャビンメイトの日本青年はダンスが上手く、ブレイクダンスが得意でした。私はサルサダンスが得意だったので、キャビンの中ではいつもダンスの話、ダンスでどう自分を表現するか、どう振る舞うか、どう感動を与えるか、ということ話を話していました。そしてダンスコンテストを開催するに至り、ブレイクダンスの彼とサルサダンスの私が競って引き分け、という結果になりました。他にも、食事の時はテーブルを変えていろいろな人と話したり、洗濯をしたら服がなくなってしまい落とし物コーナーに見に行ったり、外でバスケットボールをしたりと、そういう時に友達を作るのです。友達になると、その人の考え方が分かりますし、文化的な背景から行動も異なります。例えば、私はラテン文化から来ているので、私が幸せだということを示すために、笑顔を作ります。私が笑っていなければ、周りの人は「どうしたの？」と心配するでしょう。しかしヨーロッパの青年たちは笑顔を作らせず、日本青年はもっと笑いません。そういった状態を知ることで、誤解を少なくしていきます。もう一つ面白い例は、ラテン文化では男性が初対面の女性に対して、頬に軽くキスをするのが習慣です。初めてエジプト青年に会った時に、私は当然のごとく女性青年に顔を近づけたところ、周りが驚いて「No No No、だめ、だめー！」と反応しました。イスラム教徒と接する際

には、女性には握手するか、接触せず挨拶するのが、正しい作法だったのです。そこから学んで、イスラム青年とは身体的距離を取ることも覚えました。

■現在の社会貢献活動

私は元国会議員ということもあり、多くの社会活動に携わっています。例えば、農家と投資家をつないで、農業の生産性向上の教育をしています。また、リマの消防士を支援する一環で、NGO と連携して消防士が必要な特別な衣類などを提供するなどもしています。ペルーでは消防士はボランティアであるため、多くの支援を必要としています。



リマの消防士を支援

事業後、本当に多くの方が社会貢献活動に関わり、関わっていると気づきました。私の場合は政治を通じて社会に影響を与えることができると知り、そのことも手伝ってペルー国会議員や議会副議長へ立候補することができました。

事業で知り合った仲間とは、確かに連絡を取り合っています。参加青年の多くは首都リマの出身なので、集まるのが比較的簡単で、顔を合わせることも多いです。そしてペルーが世界船に招へいされる年には、日本大使館と連携して、よいメンバーに参加してほしいと思い、応募プロセスに協力しています。業務でカナダに行く際はいつも、世界船の仲間を訪ねています。また、私の同期（第 21 回）がペルーに来る時には、いつでも受け入れる準備ができています。数か月前にトンガで地震があった時には、同期に「大丈夫か」と声かけを行うこと以外に、何が必要か聞くなど、より深く関わろうとしました。

ペルーでも事後活動組織の国際大会を実施しました。

ペルーで世界青年の船事後活動組織グローバル・アッセンブリーを実施した際にも、スタッフとして関わり、大変多くの参加者を得て嬉しく思いました。私の家族が経営するレストランにも皆さんをお招きしました。エジプト（2010）、オーストラリア（2009）で開催されたグローバル・アッセンブリーにも参加する機会があり、「世界船の精神」を再認識することができました。私は、妻と一緒にグローバル・アッセンブリーに参加しており、旧友と出会い、新しい友人を作る良い機会となっています。こうやって旅のために貯金をし、新しい世界船ファミリーに会うのが好きですし、単なる旅ではなく世界船の精神を感じられるからです。

ペルーでの国際大会後、「Bus for World Youth」（世界青年のバス）という企画が立ち上がり、私は当初企画したメンバーの一人でした（しかし議員に立候補するタイミングでしたので、実際バスにアテンドすることはできませんでした）。「世界青年のバス」はマチュピチュまで車で青年が移動しながら、道中社会貢献活動を行うプロジェクトでした。この企画では、どんな社会貢献活動ができるかリサーチをしました。インターネットでのディスカッションをして、高齢者への活動、家族を亡くした人へのサポート、植樹、国の歴史を守る、など多くのアイデアが出ました。国際的な経験があると言うことは、ものの見方や取り組みが掛け算式に増えていきます。知識や経験は、習得したらどんな形であっても社会に還元する必要があります。教えることかもしれない、友人に話すことかもしれない、政治の場かもしれない、地球の裏側の友人を助けること、マッサージすること、金銭的支援かもしれない、ビジネスかもしれない。方法は山ほどあります。



農業従事者への支援

■ 世界船を継続する意義

「友人」としてお伝えできるとしたら、「教育が最も大切」と伝えたいです。ペルーでは公立、私立の教育の質に開きがあったり、奨学金や国際交流の場が限られていたりします。教育といえば、通常の「読み書き」も大切ですが、教育の場そのものを体験し、それを国に持ち帰る、必要な時にアクセスできる、ということも必要です。世界を目の当たりにして、さまざまな生活水準を見ることは、何か変えようとする時に大きな原動力となります。参加青年が得られた成果、事業を体験している人の声が届けられることが必要です。もちろんペルー政府においても、新型コロナウイルスへの予算と教育予算が天秤にかけられているような場面があります。私はこういった問題に対して、「どちらにも注力すべき」と答えます。人命を救うことも大切であり、ロックダウンされた人々が社会的に暮らすことも大事だからです。政治は「期待」とも言い換えられますが、そのものが存在しなければ、期待をしようがありません。ですから私のささやかな提案としては、世界船の継続には、政府の教育投資が、確実に国の財産としてリターンになっていると言うことを、参加者の声から理解いただくことです。そのために、日本青年国際交流機構や各国事後活動組織が声を届けることが大切です。

ギジェルモ・アレハンドロ・アントニオ・アリアガ・バハレス氏のプロフィール

ペルー共和国議会主席アドバイザー。リマ大学に在籍中、「世界青年の船」事業を知り、参加（2008年度）。2013年、同大学法学修士号取得。法律事務所「VALDEZ, ALIAGA, CANALES & REYNA ABOGADOS」を共同設立し、弁護士として活躍。2020年、国会議員に選出され、3月から11月まで副議長を務めた。